

未来をひらく子どもの育成（2年次）

—木太北部小スタイルを通して育む「みつめる」「かかわる」「つくりだす」力を土台として

（1）研究主題について

① 「未来をひらく」とは

「ひらく」という言葉に、2つの意味を込めた。1つ目は、「子どもたち一人一人が心をひらき、互いに尊重し合う」という意味だ。子どもたちは、一昨年度までの取り組みにより徐々に自分の個性や考えを集団の中で発揮することができるようになってきている。そこで、令和5年度からはさらに、子どもたち同士がつながり、活動していくことで、新しい自分に気付いたり、集団の中で自分の力を発揮したりする姿を追い求めていきたいと考えた。

2つ目は、「みんなで新しい未来をきり拓く」という意味だ。様々な問題や課題に出合ったとき、自分たちで、新たな解決方法を見つけ出し、新しい道をきり拓く子どもを育てていきたい。

改正生徒指導提要には、「生徒指導とは、児童生徒が自身を個性的存在として認め、自分の中にあるよさや可能性に気付き、引き出し、伸ばすと同時に社会生活で必要となる社会的資質を身につけることを支える働きである。」と述べられている。教員一人一人が、日々の授業実践や校内授業研究、教育活動全体の中で、子どもたちの自発的・主体的に成長できる過程を大切にしながら、子どもたちが未来をひらく姿を追い求めていきたいと考える。

② 木太北部小スタイルとは

教員一人一人が意識して「みつめる」「かかわる」「つくりだす」力を育むために、授業で大切にしたい8つの視点を「木太北部小スタイル」として実践を積み重ねる。

○主体的に問題や課題を発見 ○自己の目標を選択・設定 ○自分の考えをもち表出 ○可視化された思考・操作で知識を再構成 ○必要感のある対話で練り上げ、考えの広がりや深化 ○納得解をつくる ○振り返り ○実社会との関わりや社会参画 この8つの視点を授業研究や普段の授業で大切にし、積み重ねていくことで3つの力を伸ばしていきたい。研究授業を行う際は、3つの力を伸ばすために、8つの内どの視点を特に大切にするか検討し、授業後の討議で、3つの力の育成につながっていたかどうか振り返ることで、3つの力を深める授業にしていきたい。

③ 『「みつめる」「かかわる」「つくりだす」力』とは

令和3年度の現職教育では、9月から1月のおよそ半年に渡って全教師による対話を重ね、本校の子どもたちに育成したい資質・能力を設定した。はじめに、子どもたちの実態を見つめ直し、強みや弱みの分析を踏まえて、目指したい子どもの姿を具体的にイメージした。その後、現教部や教務部で検討をしたり、有志が集まって意見を出し合ったり、キャップ会で協議したりしながら、最終的に落ち着いたものが、図1である。

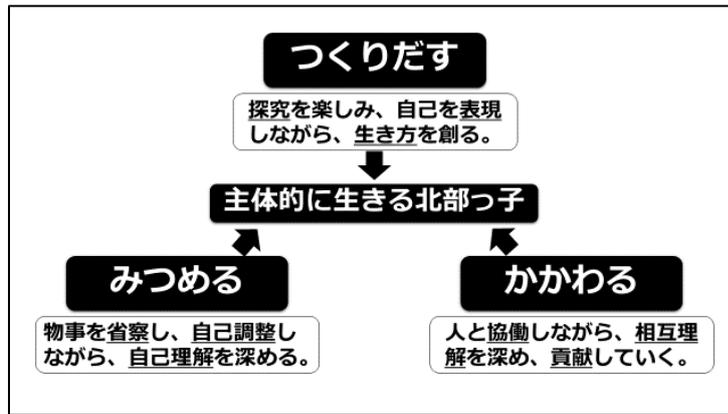


図1 北部っ子に育成したい資質・能力

世の中には「〇〇力」という様々な力があふれかえっているが、これだけは本校の子どもたちに身に付けてほしいという願いを込めて、「みつめる」力、「かかわる」力、「つくりだす」力の3つを明確に打ち出すことにする。これらは、全教育活動を展開する中で育成していく資質・能力であると同時に、日常の場面において常に指導や支援の手がかりになるものである。よって、1年生から6年生までのどの発達段階の子どもたちにも分かりやすくなるように、あえて平仮名で、リズムよく口ずさめるよう配慮がなされている。ただし、「みつめる」等だけでは具体的な子どもの姿がイメージしづらいので、それぞれの資質・能力について3つの視点で説明を加えたものが、次の一覧である。

みつめる	かかわる	つくりだす
・立ち止まり、振り返る。 (省察)	・協力しながら、学び合う。 (協働)	・意欲をもち、問いに向かう。 (探究)
・自ら学びを進める。 (自己調整)	・受け容れ、分かり合う。 (相互理解)	・個性を生かし、発信する。 (表現)
・自分のことが分かる。 (自己理解)	・集団の中で、役立つ。 (貢献)	・挑戦し、未来を切り拓く。 (生き方)

※今年度は、自分のことだけでなく、相手のことも理解し互いに尊重することができるように「かかわる」の「相互理解」の部分もさらに大切にしていきたい。

引き続きこの3つの力を育ていけるように授業研究を進めていき、授業研究後リフレクションを積み重ねていくことで、それぞれの項目においての具体的な子どもたちの姿を明らかにしていきたい。

一昨年度までの取り組みで、子どもたち一人一人が主体的に活動できるようになってきている。今年度からは、図2のような形で、子どもたちが「みつめる」「かかわる」「つくりだす」ことを行き来することを追い求めることで、ともに新しい考えや方法をつくり出す「未来をひらく北部っ子」を育成していきたい。

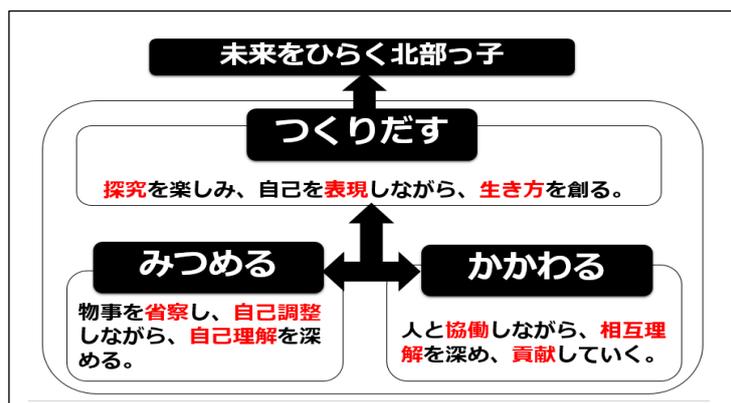


図2 令和5年度から目指す子どもの姿

(2) 研究仮説と検証方法

① 研究仮説

全教育活動において、教師も子どもも「みつめる」「かかわる」「つくりだす」力を意識し、それらを育成しようと全教職員が教育活動全体の中で、日常的に指導や支援を継続する。友達との関わりの中で協力したり認め合ったりしながら、新しい自分に気づいたり、新しい解決方法見つけたりするなどすることで、新しい道を切り拓く「未来をひらく子ども」が育成できるであろう。

② 検証方法

教師アンケート（7月、12月）、児童・保護者アンケート（7月、12月）、全国学力・学習状況調査（4月）、県学習状況調査（11月）、県版テスト（年間）、管理職の見取り、教師の振り返り（3月）

(3) 研究内容

令和4年度は「課題設定」と「学び合い」に焦点を当てて、研究を進めてきた。これら2つは数年来、玉藻中学校ブロック4校で共有されてきた研究の視点とも合致する。令和5年度には、木太北部小スタイルを通して、3つの力を育成に力を入れて研究を深めてきた。また、毎週1回、朝の活動で「探究タイム」を実施し、一人一人の興味・関心に基づく課題を設定して、自分のペースで自ら学びを進めていく、いわゆる「個人追究」の時間を設けた。木太北部小スタイルを通じた3つの力の育成や、「探究タイム」の取り組みは、香小研生徒指導部会で大切にされている研究視点の中の、「生徒指導の機能を生かした学習指導の充実（・自己決定の場を与える・自己決定の場の設定・共感的人間関係を育てる）」に大きく関わると考えられるので、今年度も引き続き、研究を深めていきたい。また、「自己有用感を育む体験活動の推進（社会性・コミュニケーション能力の育成）」のための取り組みとして、今年度はさらに、ふれあい活動や、生活科、総合的な学習の時間、特別活動にも力を入れて研究を進めていきたい。今年度も子どもの主体性や自己実現を全ての教育活動のよりどころとして大切にしていきたい。

「木太北部小スタイル」

① 主体的に問題や課題を発見

単元を貫く問いを、どのようにすればもつことができるのか。

- ・子どもと一緒に単元の学習計画を立てる。
- ・自分事の学びにするための、問題を設定する。

② 自己の目標を選択・設定

- ・めあてをもとに、今の自分の姿を見つめる時間をとり、その時間の中で自分が目指す姿を設定する時間を設ける。
- ・授業の中で自分の考えを振り返り、伸びを実感できるようにする。

③ 自分の考えをもち表出

自信をもって取り組むには、自分なりの考えをもち説明できることが大切であると考え。

- ・図や言葉などでノートに自分の考えを整理する場面を設ける。
- ・自分なりの考えをもちにくい児童には必要な支援を行う。

④ 可視化された思考・操作で知識を再構成

- ・「思考ツール」の活用も考え、論理的に考えを組み立てる。
 - ・習得した知識を自分の言葉で再構成して、問題に対する解をもつ。
 - ・グループで考えを練り合う。
- ⑤ 必要感のある対話で練り上げ、考えを広げ深める
 児童が何について話すのか対話の内容を整理することが必要である。
- ・大切にしたい言葉やキーワードなどを板書に記す。
 - ・ワールドカフェ方式やジグソー形式など学年や問題に合わせた形で交流する。
- ⑥ 納得解をつくる
- ・各自の考えのよさや違いを認め、対話を通して、協働しながら折り合いをつけて解決策や新たな価値をグループ、学級の納得解としてつくりだす。
- ⑦ 振り返り
 具体的な振り返り、授業途中での自分の考え方の振り返などを通して、児童自らが自身の伸びや更なる目標や課題を実感できるようにする。
- ⑧ 実社会との関わりや社会参画
 学習内容や学習の成果を実社会や実生活と結びつけることで、学ぶ良さや意義、自分の社会での役割などを実感し、主体的に課題を見い出したり、社会の一員としてよりよく生きようとしたりする意欲を育てる。

(5) 研究方法

- ① 原則として、毎週木曜日に現職教育を位置づけ、教師一人一人の研究と修養を推進する。
- ② 学年団の協力体制のもと、主体的・対話的で深い学びを意識した授業実践を行い、個々の教師の指導力向上を図る。学年団会を随時設定し、実践を振り返ったり教材を作成したりする。
- ③ 各学年団、特別支援団を中心に校内授業研究を行い、低・中・高学年団等の連携を図りながら実践研究を推進する。個の学びを観察・交流し、児童を見取る力量を高めていく。
- ④ コンプライアンス研修や、救命救急講習会等、より実践的な教師の指導技術や教員としての資質・能力を高める内容を充実させる。
- ⑤ 要管理児童や特別支援学級の児童についての情報共有をし、配慮を要する児童についての理解を深める。また、スクールカウンセラーとの連携のもと、教育相談の視点を取り入れて、具体的な支援の方法を検討する。
- ⑥ 人権・同和教育に関する研修では、児童の実態を踏まえて、人権意識の向上や実践・行動に結びつく研修をめざす。人権・同和教育の視点に立った学習参観（年間1回）や現地研修を実施し、研鑽を深める。
- ⑦ 教育課程運営改善連絡協議会や各種出張等での研修成果を報告することにより、校内の研修や今後の指導に役立てる。
- ⑧ 運営委員会や学年団会など、日常的に児童の情報共有をしたり、指導方法についての情報交換をしたりしながら、全教職員の共通理解のもとで全児童をよりよく育てていく体制づくりを行う。
- ⑨ 若年研修会と連動し、定期的に授業を公開し合うことで、お互いの授業実践から学び合い、理解し合う機会をもつ。また、学級経営等の相互理解のために、日常的な取り組みについても交流する。
- ⑩ 学校教育評価や県学習状況調査等との関連のもと、今年度の研究の成果と課題を検証し、次年度に向けて改善を図る。学期末にアンケート調査・分析などを行い、現教部を中心にPDCAサイクルの展開を促進する。

(6) 研究組織

① 現教部

現職教育主任、現職教育副主任により、現職教育の運営（計画・実行等）を行う。また、継続的に「現教だより」を発行したり、現教掲示板に掲示をしたりして、情報発信を行う。

② 学年団会（随時）

学年主任を中心に日々の実践を振り返り、今後の見通しをもつための話し合いを行う。また、学年団で協力しながら教材研究を行い、授業に必要な準備をする。他にも、児童についての情報交換も行き、児童理解を深めながら指導に生かす。

③ キャップ会

現職教育主任、現職教育副主任と「授業改善部会」「ふれあい活動部会」「探究・ワンチャレンジ部会」のキャップが集まり、部会別研修の実施内容を検討、振り返りなどを行い、部会別研修をスムーズに運営できるようにする。

④ 部会別研修

第1部会（授業改善・ふれあい・探究・ワンチャレンジ）では、キャップを中心に本校の教育活動の充実のため、取り組む活動や内容について部会で話し合い計画・実践・振り返りを行うことで運営や指導に生かす。

⑤ 若年研修会（不定期）

若年研修担当（指導教諭）のコーディネートのもと、教職経験5年未満の教師を中心に、希望者も加わって、自主研修会を行う。全教師による日常の授業や、校内授業研究の事前授業などの定期的な参観を中心に、若年教師のニーズに基づく研修を適宜、企画・開催する。

研究組織図

